

「よね」と「よ」・「ね」 -原始形か複合形か-

名嶋義直

東北大学大学院文学研究科

najimay@sal.tohoku.ac.jp

1. 発表の要旨

終助詞が語用論のレベルで機能することは広く認識されているが、「か」、「よね」、「よ」、「ね」に関する誤用を観察すると、不適切な形式を選択している意味レベルの誤用や、使用しなければならないのに使用しなかったり使用しなくていいのに使用したりしている構文レベルでの誤用が観察される。このことは、これらの終助詞が学習者にとって意味論・構文論・語用論のインターフェースとなっていることを示唆する。本発表ではこれらの終助詞の相互関係について考察する。具体的には、「命題の不確実性」、「命題の既定性」に着目し、加藤（2001）で主張されている「情報の排他的管理／非排他的管理」という特徴も考慮したうえで、「よね」が「よ」と「ね」との複合形式ではなく、両者の原始形であると見なせることを示し、「か」、「よね」、「よ」、「ね」を連続的に捉える見方を提案する。

2. 誤用分析

学習者の産出する事例中には、確かに終助詞の使用が任意であり、その結果、使用するか否かは語用論的に決定されると考えられる例がある¹⁾。

(1) A: こんにちは ひさしぶりですね

B: ひさしぶりです

しかしその一方で、終助詞の使用が必須であると考えられる例も散見される。

(2) A: お国の方も雪降っていますか

B: 全然降っていません

A: 日本に来てよかったですね 雪が見られて

B: ?? はいそうです

終助詞を使用してはいるものの別の形式を使用した方がふさわしいと思える誤用もある。

(3) A: 何か予定がありますか

B: 決まっている予定はないですね

A: ?? そうですね

これらの例は学習者にとって終助詞が意味論・構文論・語用論の各領域に関わる問題であるこ

とを示している。そこで「か」、「よね」、「よ」、「ね」相互の関係を考察してみることにした。

3. 考察

3.1 命題の不確実性

「は」は質問表現や確認表現で使用される終助詞である。したがって、基本的に「か」が後接する命題は何らかの点で不確実性を帯びていると言える。

(4) A: 僕は東京で友達と一緒にパーティーした

B: そうですか

一方、「よ」や「ね」が後接する命題はそのような不確実性を有していないと考えられる。

(5) A: 私のこと覚えていますか

B: 覚えています [#か/よ/ね]

「よね」は「か」と同じような特徴を有しているように思われる。

(6) A: [Bがシンガポール出身と聞いて] そうすると中国語は…

B: ええ中国語もできます

A: そうです [か/よね]

以上から、「か」と「よね」は相手から提示された新情報を受け入れる認知過程にあることを示すマーカーとして機能していると考えられる。この点において、「か」・「よね」と「よ」・「ね」とは区別されることになる。

3.2 命題の既定性

しかし、「か」と「よね」との間には相違点がある。たとえば、提示する命題が既定性を帯びている場合、「よね」は使えるが「か」は使えなくなる。

(7) A: [「具合が悪い」とBが言った。それでしばらく体調の話をした後で]

具合がわるいんです [#か/よね] いい薬ありますよ

先に挙げた例文(6)もこれと同じ観点で説明されるべきである。AはBがシンガポール出身と聞いて「Bが中国語を話せる」という推論を行ったと考えられる。しかしそれを確定的に断じることができなかつたためBに質問をした。果たしてその答えは「そうである(Bが中国語を話せる)」であった。つまり、「そうである(Bが中国語を話せる)」はAにとって新情報ではあるものの、不確実性を帯びた形ですでに想定されているという点で既定性を有していたことになる。

逆に、たとえ相手から提示された新情報を受け入れる認知プロセスにあっても、そのような既定性を帯びていない場合、「か」は使えるが「よね」は使えない。

(8) A: [電話で] 社長いらっしゃいますか

B: はい私です

A: そうです [か/#よね]

「よ」や「ね」の場合は「か」と「よね」の間に見られるような違いはなく、どちらも既定性を有する命題に後接することができる。ただし、その意味は同じではない。

(9) A: [一緒に旅行に行ってくれそうな人を探している] 思いつく人いる?

B: うん考えてみる [よ/ね]

後接命題の既定性という観点から考えると、「か」と「よね」・「よ」・「ね」とが区別される。

3.3 「よね」と「よ」・「ね」との共通性

加藤 (2001) は「よ」について、当該情報を排他的に管理する準備があることを示す一種の談話標識である、「ね」について、当該情報を排他的に管理する準備がないことを示す一種の談話標識である、とする。その論考は確かに (10) (11) のような「よ」・「ね」をうまく説明できる。

(10) A: [旅行に誘っているが、相手はアルバイトがあると言った]

ちょっと休んだ方がいいかな

B: でもねバイト絶対に休めないよ

(11) [旅行の誘いを断ったあとで] またチャンスがあれば一緒にどこか旅行に行きたいね

しかし興味深いことに、(10) (11) においては「よね」もかなり近い意味で使用することができる。「よね」が「よ」・「ね」に近い意味で使用される場合があることがわかる。

(12) でもねバイト絶対に休めない [よ/よね]

(13) またチャンスがあれば一緒にどこか旅行に行きたい [ね/よね]

「よ」と「ね」はこれまで伝統的に、同一レベルにおいて意味論的・語用論的に相互に対立する概念を用いて説明がなされてきた。それにも関わらず、「よね」はしばしば「よ」と「ね」との複合形式として位置づけられて分析されてきた。このことは問題をより複雑で解決困難なものとしていると言える。「よ」と「ね」の意味機能が同一レベルにおいて対立しているとする一方で、「よね」が「よ」と「ね」の複合形式であるとするなら、当然矛盾が生じるからである。

この問題に対し、滝浦 (2008) は先述の加藤 (2001) を踏まえた上で、「よね」の意味を「自分の管理下にある情報について言明した上で、それが聞き手の管理下にも同様にあることを確認したりそう促したりすること」(p. 140) とすることで解決を試みている。一方、名嶋 (2006) は「よ」を関連性理論で言う「表意」レベルにおいて当該発話が聞き手にとって関連性を持っていることを示すマーカであることを見なし、「ね」を関連性理論で言う「高次表意」レベルにおいて当該発話が聞き手にとって関連性を持っていることを示すマーカであることを見なしたうえで、「よね」を当該発話が表意レベルにおいても高次表意レベルにおいても関連性があることを伝えようとする話し手の意図を聞き手に伝達していると考えている。2つの研究は説明原理こそ異なれ、[[[命題] よ] ね] と考える点でその目指す方向は同じである。

ただし、既に上で見たように、「よね」は「よ」に接近することもあれば「ね」に接近することもある。その現象をどのように記述すればいいのであろうか。残念ながら滝浦（2008）や名嶋（2006）の考え方を説明に用いるとアドホックな面が出てくる。「よ」か「ね」どちらかの意味機能に焦点が当てられており、そのどちらに当てられるかは語用論的に決定される、としか説明できないからである。また、もし「よね」が「よ」と「ね」との複合形であり、その意味機能の点で「よ→ね」という順でしか承接できないなら、「かよ」とか「かね」が言えて「よね」も言える以上、「かよね」と言えていいはずであるが、実際には非文法的である。

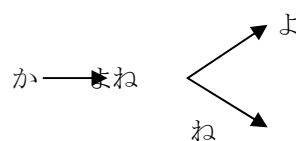
本考察は「よね」を「よ」と「ね」の複合形と見るのではなく、「よ」の意味機能と「ね」の意味機能の双方が未分化の形で共存している原始形であると見なし、かつ、「か」とも連続するものであると捉えることを提案する。その立場に立てば、「よね」が「よ」に接近したり「ね」に接近したりする現象をその特性から充分にあり得ることとして説明できるし、「か」と「よね」の相互承接が非文法的になることも意味機能の重複という点から説明することが可能になる。

4. 結論

命題の不確実性、命題の既定性、「よね」と「よ」・「ね」の共通性から考察した結果、「よね」は不確実性という点では「か」と連続するが、既定性と排他的管理性という点では「よ」・「ね」に連続することが明らかになった。また「よね」を「よ」と「ね」それぞれの意味機能を併せ持つ原始形であると見なすことの優位点も指摘した。「よね」は「か」と「よ」・「ね」とのインターフェースであると同時に「よ」と「ね」のインターフェースでもあると考えられる。

(14) 「か」、「よね」、「ね」、「よ」の相互関連性

	か	よね	よ	ね
不確実性	(+)	(+)	(-)	(-)
既定性	(-)	(+)	(+)	(+)
排他的管理性	(-)	(+)(-)	(+)	(-)



注

1) 以下の用例は発表者が行った留学生向け会話授業の中の RP を文字化したものである。

参考文献

- 加藤重広 (2001) 「文末助詞『ね』『よ』の談話構成機能」『富山大学人文学部紀要』(35号), pp. 31-48.
 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』, 研究社.
 名嶋義直 (2006) 「終助詞ヨとネに関する語用論的考察-手続き的意味の観点から-」, 『第4回日本語教育研究集会予稿集』, 於 名古屋大学 2006. 8. 7, pp. 18-21.